

## 東谷睦子先生の思い出(二)

二十七回生・花組一同

我々、昭和31年3月に千二小・花組を卒業した仲間は、同28年より3年間(4年生から6年生まで)、東谷睦子先生の教えの元で過ごしました。このたびその先生の事や当時の思い出を書くために、その仲間たちに寄せ書きを募りました。

我々は卒業以来、今日に至るまで途中で20年間ほどのブランク(女性の場合は子育て期に当たります)はあるものの、ずっと定期的にクラス会を続けております。これは先生の求心力は当然として、就職・結婚等で我々自身は他の地に移っても、ほとんどの仲間の実家は千里山にあり、先生ご自身も千里山にお住まいで、我々の母親連と買い物等で出会われることもあり、結果、多くの仲間の現住所が解った事もあります。さらにブランク中も一部の方は交流が続いており、それが核となって復活しました。さて、これからその仲間から寄せられた思い出の断片を紹介させていただきます、当時の先生像を復元してみたいと思います。

### 東谷睦子先生のプロフィール

先生は確か昭和元年生まれで、千里第二小学校の卒業生です。ご主人の勝司先生も千二小の先生をされており、職場恋愛結婚だったと思います。勝司先生は、第8号会誌で「雪・月・星・花・・・ものがり」を執筆され、学級名の由来を紹介していただきました。

睦子先生が我々の担任になられたのは、先生の御歳27歳から30歳に当たり、体力・気力とも一番、脂の乗り切った頃ではなかったのでしょうか。と今、生意気にも思います。情熱というには通俗ですが、何か熱気のようなものが愛情と一緒に注がれていたのだと思います。我々の教育方針は実にシンプル且つ明快で、子供

にも解りやすいものでした。

\* 男女同権・平等

\* 暴力・戦争絶対反対

\* 全ての事は、結果ではなくどれだけ頑張ったかが大事。あらゆることへの機会は皆に均等に

\* 自分達で考え、自分達で議論し、自分達で決め、

解決 仲間です。「楽しみを・痛みを分かち合いなさい」というものです。

それでは、仲間の皆さんから寄せられた思い出の断片を紹介します。

Aさんより

6年生の後半の生徒会役員選挙がありました。当時は確か、会長・副会長・書記・会計の四役だったと思います。その時に先生は「出たい人は出来るだけ出なさい。何人出てもかまいません。同じクラスから同じ役に複数人が出れば共倒れに成るかもしれませんが、いい思い出になりますよ。」と

結果、6年花組から、全役員に2名ずつ出馬

計8名 演説会の時は本人の施政演説の他に、応援演説が加わりますから、これまた8名 更に、選挙ポスターの作成応援も必要で、正にクラス挙げての選挙運動を展開しました。

さてその最終結果ですが・・・当然、全員落選でした。何かお祭り騒ぎのよう とうかスポーツミたいで確かに楽しかったです。以来、中学・高校に至るまで、この種の選挙には全く無縁だったので、私にとって唯一の選挙運動でした。いい経験有難うございました。

B君より

先生はよく討論会を実施されました。当然議長・副議長は我々の仲間から選ばれました。時には皆がドキンとする内容もあります。それでも先生が結論の口火を切られる事はありませんでした。そんな発言にも必ず誰かが意見を述べ、我々だけの議論が続きました。余程收拾が着かなくならない限り、先生が決着を図られる事はありませんでした。

C君より

時にこの討論会が父兄参観日に実施された事もあります。ある時に討議が紛糾・混乱した事がありました。それでも先生が出張る事はありませんでした。議長・副議長もしどろもどろ・・・とその時、議長のお母さんが突然「さー議長 しっかりして」の野次・・・議長は益々しどろもどろ・・・

先生の目線はいつも我々と同じ高さ。誰に対しても同じ眼差し。男の子にも女の子にも 出来る子、できない子にも

Dさんより

とにかくよく作文を書かされました。当時は綴り

方とも言っておりましたが。「伊勢修学旅行」に

いては400字詰め原稿用紙に30枚、卒業間近には「私の歴史」のタイトルで60枚もの超大作です。

(Dさんはどちらにも60枚書かれたそうです。しかも今も残っている とのことでした。)

原稿用紙30枚は1万2千字になります。この千里山会誌が21行・24文字・2段構成ですから、1頁約1千字です。ということは12頁分・24頁分に当たります。

当時の我々の作文は、その場に在ったこと・見たこと等の事象の羅列のみがほとんどでした。

そこで先生はよく「在ったこと・見たことの羅列ではなく、その時に感じたこと・思ったことを書きなさい」と口が酸っぱくなるぐらい言われていました。でもネー 当時の我々とすれば、どうやって書けばいいのか???

E君より

先生がある日突然「論文を書きなさい」と命じられました。「論文? それって何?」と皆大騒ぎ。確かその時の先生の説明では「テーマを各人ひとり一人が考えて、それについて自分の意見を述べる。」

というものでした。

「\*\*について意見を述べよ」ではないのです。

\*\*に当たるものも自分で考えなければなりません。\*\*は各人で異なります。しかも自分の意見です。内容は戦争について書きましたが、それが論文の形をとっていたかどうかは大いに疑問です。

再びDさんより

綴り方や論文の他、文集をよく作られました。4〜6年生時に毎年必ず一冊作られました。今から思うと楽しい思い出ですが、当時は結構、負担に感じたと思います。ただ、作品を全員で作っただけでなく、ガリ版書きから謄写版印刷まで自分達にさせていただいたので、各班単位で遅くまで文集作成に励んだ事が楽しい思い出として記憶に残っております。

卒業直前に完成した文集から

我々が千二小を去る1年くらい前(昭和30年前後)から千里山も次第に開発の手が伸びてきました。駅から学校までの左側の山が削られ、郊外学園の方でも宅地開発が進みました。

そのような状況を感じ取った我々の仲間、  
豊田（現笹倉）正子さんが最後の「さかみち」に載  
せた詩を紹介させていただきます。

変り行く千里山

春はつつじにももさくら  
夏は青葉のおう嶺  
せみの鳴き声ひびきゆく  
秋はききようにすすきのほ  
十五夜月夜のおそなえに  
虫の鳴き声すずとなれ  
北風はげしい冬がきて  
お山の木々も野の虫も  
深い眠りに入る頃  
大きな機械まかり出て  
お山の木々をはじめとし  
平和な野原もはかいされ  
ふかいみどりもきえはてて  
ただ学校の森ばかり  
青いお山の千里山  
のちは都会になりかねぬ

この転載に当り、「ご本人に許可を仰ぎましたが、  
その折に添えられたご本人の文章を紹介します。  
「さかみち」第I合の先生の冒頭文、改めて感動で  
す！人の成長期の大切な時季にこういう考えを  
持つていられる先生に教えを受けた私たちは幸せ  
でしたね。

その他、我々の仲間の一人、寺島靖子さんは千二  
小卒であり、更に「結婚後、母親として千二小へ（長  
男の二年生の時に東京から千里山に戻る）。その時  
の校長先生は西田慶二先生で寺島さんの在校時代  
の資料を見せていただいたそうです。また長女が一  
年生の折、担任の先生が「病気で入院中当時教頭先  
生の東谷勝司先生が代理で教えを受けたそうです。

以上が皆さんから寄せられた思い出の断片です。  
文集について補足しますと、その全ては「さかみち」  
という名前で、先生が名付け親です。豊田さんの思  
い出にある先生の冒頭文を次頁に紹介させていた  
だし、更に最後のページに昔の東谷先生「夫妻の写  
真と最近の睦子先生のお写真を掲載します。

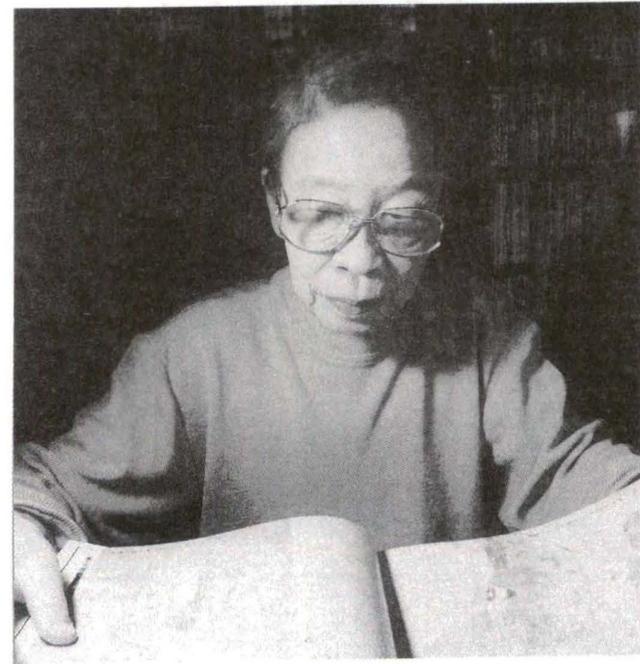
「さかみち」を眺む前に

千里山の「さかみち」を、まい日にかよって学校にくる。この「さかみち」をいく返となく通って、みんなが本心に考  
えていること、感じたことをかいて「さかみち」の出来上る日を心待ちに待っていた。「さかみち」を手にしたみ  
んなのうれし顔、頼、頼。もっともつどうれしい事は、四年になった時、みんなが一番きらいだったつづ  
り方が、だん／＼すきになってきてくれたこと。まだ／＼文もまずく、字もまだないのですが、それはだん／＼  
なふ丁事が出来ると思います。まず、すきになること、そして書くこと、これが第一です。  
書くためには、いろいろな事を見て、知って、考えなくてはなりません。それでつづりがどんなに大切か  
という事がわかるでしょう。たとえは、キヤンバラの紙しばいを見たり、ハストルのうち合いの映画を見た時、  
「ワッ、ふもしろいな」とか、「おんじええなあ」とかいう声をきくのですが、一どこれを静かに考えながらつづ  
り方にかいてごらん下さい。ほんのちよつとしたことから、力をふりまわしてころしあいをしたり、一人で  
何人もの人をざりこしたら「かんじええな」と言うような事が、どんなにばかな事でも、どんなにまちがっ  
たことであるかわかると思えます。ですから、みんながたとえどんな小さなこと、学校であつたけんか、お  
家の争つたこと、お夕はんの時のみんなの話などでもつかまえて、どし／＼書くようになれば、そのなか  
ら、正しいばんだん、考え方が生れてくるのです。  
このように、つづり方はみんなの心を育て、よい人をつくるのです。これからの人の一番大切な考え「人  
にめいれくさかけない」又「他の人や自分の、いのちやくらしを、大切にす」と言う助の考え方や、おこぼ  
いも、詩やつづり方によって育つて行くことが大事だと思います。  
では「さかみち」が少しでもみなさんの力になるよう希望します。

一九五三、一三、二八 東谷睦子



初めてお二人で撮られた写真だそうです。  
右 東谷勝司先生 左 東谷睦子先生  
(昭和二十七年十月撮影)



最近の東谷睦子先生  
(平成二十一年五月撮影)